

キーワード：継続・連携、自分事としてとらえる、各教科等における情報モラル教育

I 研究について

1 本校の実態と課題

本校の情報モラルに関する実態調査によると、家庭でインターネットを利用している割合が98%を超え昨年同様の高い使用率である。約8割の生徒が自分専用の端末（スマートフォン、タブレット、ゲーム機等）を所持しており、家庭での一日のネット接続時間も増加傾向にある。平日3時間以上使用する生徒の割合は、令和3年度の実態調査に比べて14ポイント以上の増加が見られた。Instagramの使用率が上がるなどアプリの使用も増え、それに伴うように問題も起きている。保護者アンケートの回答からは、ルールに家庭差があり苦慮する姿がうかがえた。職員においては、情報モラル教育の指導に関わっているとの回答は昨年に比べ大きく増加した。しかし、生徒が知識として情報モラルを理解していても、実生活に結びついていないことが課題となっている。そこで本校では、昨年度の研修を生かしながら、自分事として捉えさせ、実生活において一歩踏みとどまることができるような指導を目指して研究を進めていくとともに、保護者との連携を図られる授業等の計画をすることとした。

2 実践概要（授業実践、授業研究会等）

時 期	実 施 内 容
4 月	実態調査（生徒）
4 月	校内研修 全校道德の実施
5 月 27 日～	実態調査（保護者 教師）
7 月 8 日	生徒・保護者対象 情報モラル教室の実施 講師 相馬警察署
夏休み期間	校内研修 「静岡大学 塩田真吾先生の NITS 動画」
9 月 1 日	地区別研究協議会で実践発表
9 月 22 日	第 1 回 校内授業研修会 「学級活動」～リスクマネジメント・クライシスマネジメント～
1 1 月	ネットモラル診断テストへの参加
1 2 月 16 日	第 2 回 校内授業研修会 「保健体育」～休養・睡眠と健康～
1 月	1 年間のまとめ作成

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践

(1) 全校道徳（4月26日実施）



ゴールデンウィーク中の SNS トラブル防止のために、文部科学省の「情報化社会の新たな問題を考えるための教材～教材⑥写真や動画が流出する怖さを知ろう」を使用し、全校一斉授業を行った。全クラスを Zoom でつなぎ、全体進行（配信）がファシリテータを担う全体とクラス担任主導で進むクラス活動部分に分けて授業を進めた。生徒たちはインターネットの特性（拡散性と記録性）を学習し、これからの自分の行動を考えることができた。ワークシートは自宅に持ち帰り、保護者にコメントをもらうことで、保護者も情報モラル教育に触れることができた。

学んだことを保護者に伝えて話し合い、意見や感想を書いてもらいましょう。

保護者からの言葉
個人情報や写真など、悪意を持った人にいろいろあげられてた人はほじょ
じゃなかったのに」となってしまったら怖いと思います。

(2) ネットトラブル防止教室 ～保護者との連携へ向けて～（7月8日実施）

夏休みを前に、生徒指導部が中心となり相馬警察署の方を講師に招き、ネットトラブル防止教室を実施した。

「子どもにスマホを持たせることは、赤ちゃんに包丁を持たせるようなもの」など普段気軽に使用しているスマートフォン等の危険性やネットトラブルの具体的な話をいただいた。新型コロナウイルス感染症予防のため保護者の参加は中止となったが、PTA 会長が親の立場から思いを話すなど学校と保護者が連携した活動であった。



2 校内授業研究会での実践等

(1) 第1回校内授業研究会(9月22日実施)

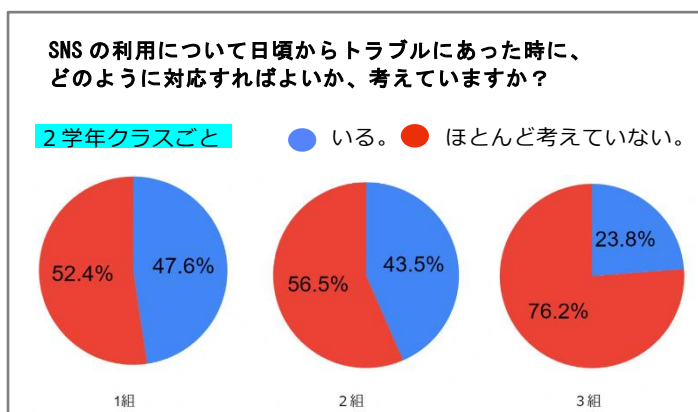
学級活動(2)「SNSの上手な使い方を考えよう」の実際

〈生徒の実態と授業構想〉

5月にネットの特性について情報モラル教育を実施したが、その後も画像投稿トラブルが発生した。画像投稿によるSNSトラブルについての全校指導を継続して行うこととし、より自分事として捉えさせることを指導の重点とした。授業内容はリスクマネジメント(被害にあわないために)とクライシスマネジメント(被害を小さくするために)を扱った。

〈授業の実際〉

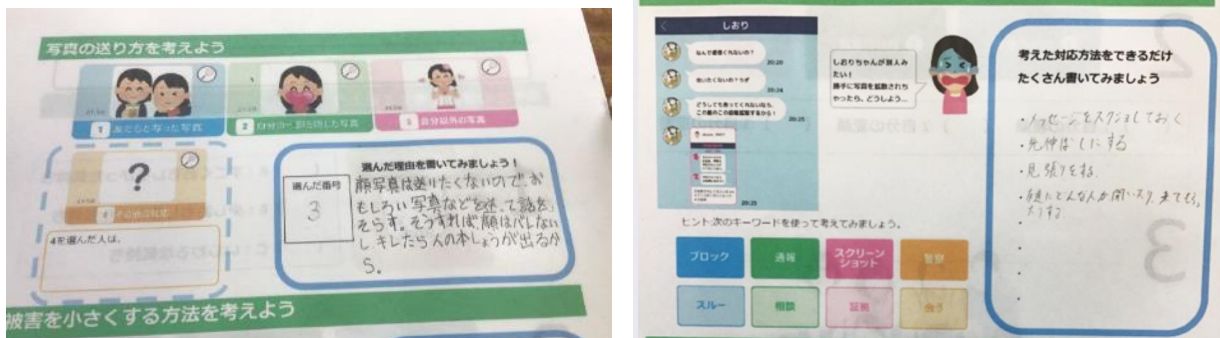
授業の導入では、事前アンケートの結果をグラフ化し配信した。下の円グラフは「SNSの利用でトラブルがあった場合の対応を考えているか」という問いの結果である。クラスや学年によって結果に違いが見られ、子ども達は興味を持って自分たちの結果を捉えていた。



右の写真は、LINEスタンプにどのような感情が込められているかを考え、自分の考えを挙手で示している場面である。全員が同じ選択肢を選ぶことはなく、自分と他人との感じ方の違いを実感できる場面であった。授業では、この感じ方の違いから、どのようなトラブルになっていくかをワークシートやスライド資料を使い学習を行った。



授業の後半部分では、トラブルにあうリスクとトラブルになった時にどのように被害を小さくするか対応の仕方考えた。個人→クラスのグループ→Meet による他学年との意見交流という形で活動した。子どもたちは学年問わず普段 SNS でつながっているの、全校で同じ授業に取り組むことに意味があると考えた。他学年との意見交流をすることでいろいろな意見が聞くことができ楽しかったという感想や互いの刺激から意見が引き出される姿が見られた。



(2) 第2回校内授業研究会 (12月16日実施)

保健体育科 (1 学年)

〈生徒の実態と授業構想〉

デジタル端末を長時間利用しているために、睡眠時間が十分でない生徒がみられる。保健体育の「休養・睡眠と健康」という単元で、今回はデジタル端末による身体的・精神的疲労に焦点をあて、教科における情報モラル教育を考えた。

※デジタル端末=スマートフォン・タブレット端末・ゲーム機・TV パソコンとした。

〈授業の実際〉

右の写真は、授業前 1 週間の生活記録調査の結果を見ているところである。

生活記録には、24 時間の時間枠に学習、食事、お風呂、睡眠、デジタル端末の使用を色別に記録してある。(ロイロノートで記録・赤がデジタル端末)

モニターで一斉に見た後に、タブレット端末で互いの結果を見せ合い、比較することで自分の生活を客観視し、デジタル端末の使用の仕方考えるきっかけとした。





デジタル端末の長時間利用によって体にどのような影響があるかをワークシートで考えた。「時間がわからなくなる」「情緒不安定になる」など、グループで出た意見をクラス全体で確認した後は、「ネット安全ガイドブック」を使用し、長時間利用で心身に様々な症状が現れることを具体例で示し、その怖さを学習した。

◎個人で考えてみよう

- 目がつかいよ
- 視力があがる
- ホーとする
- かたかこる
- イライラする

◎他のメンバーの意見

- くひかいたくなる
- 全身がいたくなる
- 情緒不安定になる
- 運動不足になる

◎他のグループの意見

- 時間がわからなくなる
- 寝がホヤホヤする

授業の後半では、「次の日に疲れを残さないためのチェックリスト」を作成した。チェックリストの項目を考えさせることで、自分事として捉えさせることをねらいとした。デジタル端末に関わることを必ず1つは考えること、個々の生活が違うので、自分にあ

＜疲労を残さないためのチェックリスト＞	
項 目	✓
(例) ストレッチングをする。	
① 軽い運動をする	
○ ② デジタル端末を使う時間を30分減らす。	
○ ③ 使って良い時間とダメな時間を決める	
④ デジタル端末以外の好きな事(趣味)をする。	
⑤ 風呂に長く入る	
⑥ 1時以降は使わない	

※デジタル端末使用に関するものには○をつける。

った行動可能なもの考えることとした。生徒たちは自分の生活を振り返り、学習したことを生かしながら楽しく学習活動を進めることができていた。

(3) 研究協議会の様子

第1回、2回とも、静岡大学准教授 塩田真吾先生よりご指導を頂いた。

〈第1回授業研究会について〉

1学期に行った授業、さらに今回と校内で情報モラル教育研究を継続的に進めていること、クライシスマネジメントを取り上げたことがよいとお話をいただいた。改善点としては、ワークシートで画像投稿のリスクを考えさせる際に、選択肢から一つを選ばせるのではなく、リスクをグラデーションで考えさせ、選択肢を並びかえるようにするとよかったとご指導いただいた。人間は白か黒かだけで物事を考えるよりもグラデーションで判断することの方が多いということや、リスクの考え方を学ぶことができた。

グループ協議からは、全学年で授業を行うことで学年間での学び合うよさや、SSRの教室の子どもたちの反応や本音を聞くことができたという意見が出された。

〈第2回授業研究会について〉

塩田先生より、授業中盤に「ネット安全ガイドブック」でネット依存の事例を出すことで「怖がらせる」指導になっていたが、その後「疲れを残さないためのチェックリスト」をつくることで、具体的な行動目標に落とし込んでいるところがよかったと評価いただいた。また、「30分時間ができたらどんなことをしたいですか？」という質問をされ、教師それぞれに会話が盛り上がった。生徒たちが「〇時間あったらこんなわくわくすることをやってみたい」というリストをつくることで、時間ができたからゲームということではなく、新たな取組につながるという方法を教えていただいた。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 校内授業研究会を通して、リスクをグラデーションで考えさせることの意味、タイムマネジメントの指導について具体的な行動目標や取り組んでみたいことをリスト化するなど、塩田真吾先生からのご指導を受け、情報モラル教育の理解を深めることができた。
- 昨年度は一部の学年やクラスでの情報モラル教育にとどまっていたが、今年度は全員が関わることができた。各教科で指導できる情報モラル教育についても考えることができた。
- ネットトラブル防止教室や授業ワークシートの持ち帰り、学校通信での情報モラルの啓蒙など、保護者を巻き込む活動をすることができた。
- 生徒指導部、ICT 担当、養護教諭、生徒会など、それぞれの担当が積極的に情報モラル教育を実践していた。

2 課題

- 情報モラル教育は1回では完結しないので、今後も継続して指導を続ける必要がある。
- 全教員、全教科等で取り組んでいくことを継続していく必要がある。
- 保護者や地域、関連機関との連携について今後も推進していく必要がある。
- 育てたい生徒像についての話し合いを継続し、情報モラル教育について教師一人一人が学び、知識や指導力を高めていく必要がある。

【参考 HP 等】

一般財団法人 LINE みらい財団. 「SNS ノートしずおか」.

https://d.line-scdn.net/stf/linemiraicorp/ja/events/snsnoteshizuoka_4.pdf (参照 2023-3-12)

一般財団法人 LINE みらい財団. 「GIGA ワークブック活用の手引き」.

https://d.line-scdn.net/stf/linemiraicorp/ja/events/GIGAWorkbook_Standard_202210.pdf
(参照 2023-3-12)

神奈川県警・神奈川県教育委員会・一般財団法人 LINE みらい財団 「SNS の上手な使い方を考えよう!」.<https://www.police.pref.kanagawa.jp/mes/mesd5053.htm> (参照 2023-3-12).

文部科学省. 「情報モラルに関する指導の充実に資する〈児童生徒向け動画教材、教員向け指導手引き〉・〈保護者向け動画教材・スライド資料〉等.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1368445.htm (参照 2023-3-12)